

万葉思^{しの}ひ草 十二

―若草、和草幻想― 三

升 田 淑 子

「妻（夫）」にかかる枕詞「若草の」について、一般に説かれる「若々しく新鮮な妻」という意味に収結され得る語ではなく、神話的物語的な時空を背景とした幻影的な姿として、人々の心緒に描かれたと述べてきた（『万葉思^{しの}ひ草 十一 若草、和草幻想 一』『学苑』第八〇二号）。したがって、妻（夫）という立場にある者全てが「若草」たり得たという感覚ではなく、古代の精神世界から生み出された語の領域があり、その領域から放たれる光によって歌の中で照照と輝き出るものであった。「草」に感應を興す古代相は古く、「花」によりも「草」による方が、はるかに深い真理の淵に立って、人間の性命に逢着することができる時代があった。

『万葉集』には、「草」の固有名詞を含めて、複合語が「あきし、あやめし、あさし、かげし、こひし、しこし、しのぶし、たむけし、つきし、にこし、にはし、にひし、ねつこし、はるし、ふるし」など、約四十種ある。この内、「若草の妻」に対応させることのできる、妻に直接結びつく「草」は、「和草の花つ妻」（巻十四―三三七〇）と歌った例を持つ「和草」しかない。折口信夫が「若草の」を意味が分らないといって難解視したことを想起すると、「和草の」もその音触からして、意味の一通りでないことが予測される。それは、実態を見せないで青霞の向うに居るような妻であった「若草」と、古代語の感覚から推して、「和草」がそうかけ離れたところに在る妻の姿ではないと考えられるからである。「若草」がそうであったように、常にして訳される「和」からの「柔らかい」という本性が一首一首の歌から乖離して行く、そのかすかな裂け目から、透けて見えて来るものがあるように思う。『万葉集』には、次の四例の「和草」が残されている。

① 蘆垣の中の似児草にこよかにわれと笑まして人に知らゆな（巻十一―二七六二）

② 射ゆ鹿をつなぐ川辺の和草の身の若かへにさ寝し児らはも（巻十六―三八七四）

③足柄の箱根の嶺ろの和草の花つ妻なれや紐解かず寝む(巻十四—三三七〇)

④秋風になびく川辺の和草のにこよかにしも思ほゆるかも(巻二十一—四三〇九 大伴家持 七夕の歌八首の内)

右四例の「にこぐさ」の原文は、①「似児草」、②「和草」、③「余古具佐」、④「余故具左」で、音訓仮名入り混じっているが、解釈は「和」に「柔」と通じて、今も述べたが「やわらかい草」とされるのが一般的である。他に、『大和本草 九』の「篤信云、和草、俗に云はこね草なるべし。」、つまり箱根羊歯をとる説がある。③の「箱根の嶺ろ」が根拠となつていふと考えられるが、②④は川辺であり①は蘆垣であるから、地名に沿う必要はないであろう。また、『倭名類聚鈔』巻二十にある「女葳蕤」で「恵美久佐」、いわゆる「甘野老、萎蕤」とするものもある。契沖の『万葉代匠記』が記す「萩の異名にや」とするのも、鹿が妻問うという萩からで、相応わない。沢瀉久孝『万葉集注釈』は、「こは花につぐのだから花の咲く草」と考えているのも少々漠然としている。折口信夫は「若草」同様に、「和草」についても慎重である。はこね草、はこね羊歯はいけないと言ひ、「にこ草」を普通「柔草」と説くのも疑わしいとして、「もしにこ(柔)草と言へるなら、なよ草と称する髪人形を製する草とも解けるが、其もよくない。」(なよ草は月見草を指すか)と、定めかねている。折口自身は、「かのにげ草或は単ににげ草といふ玄参科の植物に当るだらう。」(『折口信夫全集 第十三巻 三三七〇歌の語釈』)と、人参の古名をあてている。細根を根拠にしたかと考えられるが、説得力は弱い。以上、諸説は多いが、なお「和草」が歌語としての生命を「柔らかない草」に委ね切れない不確定な要素を含む古語であったことが知られる。荷田信名の『万葉童蒙抄』に「一説にかづら草」をあげ、「今童子のかづらにして玩ぶ草、垣根に生るしなへたる草有。古くは其草などを云けるにや」と説いているのは異色で興味深い。

『万葉集』の「和草」四例は、和草の生えている場の提示を序とした、古歌謡の様式をとどめている。序表現の①「蘆垣のなかの似児草」、②「射ゆ鹿をつなぐ川辺の和草の」、③「足柄の箱根の嶺ろの和草の」、④「秋風になびく川辺の和草の」は、しっかりとした骨組みを持つ構成で、特に②は、『日本書紀』に、斉明天皇が、天逝した皇孫建王を悲傷して「射ゆ獣を 認ぐ川辺の若草の 若くありきと 吾が思はなくに」と歌った歌謡と類似する点で、歌謡性、伝承性が高い。紀歌謡は、「和草」ではなく、懸かり方としては珍しい「若草の若く」と続いている点で万葉と異なるかに見えるが、四句の「若くありきと」と、②「身の若かへに」とは同趣であり、紀歌謡の「若草」が②の「和草」と融和し合ってくる。

『万葉集』の四例の内、①④は「和草」と音の関係で「にこよかに」にかかっており、この限りでは意味上から「和草」を解くことは難しく思われる。したがって②③を基幹として、まずおさえておきたい。②③の歌は、③が「和草の花つ妻」、②が「和草

の身の若かへ」と、華やいだ雰囲気包まれる。「和草」もそれに共鳴して、一層のなやかさで優美を演出すると見せるや、これらは一転して、③が「花つ妻だと言ふのなら紐を解かず寝ようが、(今さら気取ることもあるまいよ)」と、揶揄的な言い草となり、②は「身の若い上に、ああ寝てしまったよ」と、望外だの感嘆しきりなのである。この反転的な展開と、狂喜乱舞するかと思われるような二首の心的な基盤となるものは、「花つ妻」「身の若かへ」が、文脈上結婚前の、まだ未熟な年若い乙女であったところに帰着する。ここにおける「和草」は、そのような乙女を象徴する「草」であったということになる。そのことは、「柔らかな草」で解釈できそうにも思われるが、しかし、結婚前のある特殊な期間にある乙女を、折口が直感的に「疑わしい」と言ったように、「柔らかな草」で古代の真意に届くことになろうか。歌が、相手の乙女の若いことを特別に扱って躍如としていることを考えれば、ある種の危険を愉悦する秘かな意味あい染まってくる。

①④は、「和草」が同音の「にこよかに」を導き出す序の關係にあって、修辭として何ら問題はないように見える。ただ、「にこよかに」という語は集中で当該の二首にしかなく、「和草」との特別な係わり方が音以外にあるのかも知れない。①の「にこぐさ」の原文「似兒草」に表意があると見るのは、強ち無理ではない。とするとそこにはごく年若い年齢の乙女が想像され、問題はむしろ、幼い乙女の「にこよか」な「笑み」の方へと伸暢して行く。「われと笑まして人に知らゆな」に寝るという直接行動の影の見えないことを読みとるならば、「人に知らゆな」という恋の常套的な言葉が、謎めかした大人の口ぶりに聞こえる。

「笑ひ」が呪的行為であったことは、記紀神話天岩戸隠れですでに論じられて周知である。天照大神を岩戸から引き出すために演じる鈿女の神樂を見て、その嬌態に神々が一斉に笑ったことが、天照大神を呼び戻す力となる。この「笑ひ」で岩戸を開くこと、すなわち境界を超えたことを、恋や結婚にも敷衍して考えてみることが出来る。『万葉集』高橋虫麿の「詠勝鹿真間娘子謠」(巻九一八〇七)は、「望月の 満れる面わに 花の如 笑みて立てれば 夏虫の 火に入るが如 水門入りに 船漕ぐ如く 行きかぐれ人のいふ時」と歌っている。この「笑み」は、結婚を承諾した笑みではなく、然るになおそれを誘うような境界に立つ「笑み」であって、男たちが皆求婚に行き迷う。また、同じく虫麿の「詠上総末珠名娘子」は、「その姿の 端正しきに 花の如 咲みて立てれば 玉梓の 道行く人は 己が行く 道は行かず 召ばなくに 門に至りぬ」(巻九一七三八)と歌う。これも、「笑み」が結婚前の呪的行為であったこと、境界は常に危険を孕んだ所であり、そのような境界に立ってなされる行為であったことを暗示している。さらに『万葉集』では、このことを風流な恋歌として言い做しているのが見える。「道の辺の草深百合の花咲に咲まひしからに妻といふべしや」(巻七一二五七)、「道にあひて咲まひしからに降る雪の消なば消ぬがに恋ふといふ吾妹」(巻四一六二四聖武天皇)のように、「あなたを見てにっこりとはは笑んだだけで、私のことを妻だというべきでしょうか」「偶然道で出会ってた

だほは笑んだだけに、恋に死んでしまいそうですというのですね」と、軽く往している。「笑み」には、結婚の前の呪的な交感の上に、両性の懸引きも交差する、複雑な問題があったようであるが、①の「われと笑まして」も「妻」とまで言えない、いわゆる境界に居る相手であったことが理会できよう。「にこぐさ」の原文「似児草」に立ち返れば、「似児草にこよかにわれと笑まして」は、③の「花つ妻」（ちなみに、「花つ妻」は「花笑み」に連想されて行く）、②の「身の若かへ」と次元を等しくし、いずれも幼く若い「妻」以前の乙女を指すことになる。この三者の整合性は、「和草」が固有の植物名ではないことを示唆すると共に、「柔らかな草」よりももっと、象徴性の高い呪的呼称であったことを考えさせる。幼い妻、早期結婚への憧憬願望があったことは、『万葉集』の次のような歌によっても推測できる。三方沙弥（伝未詳。出家して間もない僧）は園臣生羽の娘子を妻としたが、時を経ずして病に臥したため会えなくなってしまった。そこで二人が贈答した歌「たけばぬれたかねば長き妹が髪この頃見ぬに搔きいれつらむか」（巻二―一二三 三方沙弥）、「人皆は今長しとたけと言へど君が見し髪乱れたりとも」（同 一二四 娘子）は、娘子の髪型によって二人を隔てた時間の長さを表現しているが、三方沙弥が娘子を妻とした頃は、まだ童女の振分け髪であったことが知られる。娘子は、今では髪も伸びて結婚適齢の象徴である鬘に結い上げることが出来るといい、一般的な婚期に入ったことをほのめかしている。また、「振分の髪を短み青草を髪に縮くらむ妹をしそ思ふ」（巻十一―二五四〇）は作者不明歌であるが、一日も早く鬘が結えるようにと、草（イネ科の植物か）を髪に結びつけて、草ごと髪を束ね上げる幼い恋人（妻）を思うというのである。野性的で可憐、背伸びをするこの娘子も童女の髪型をしていた。三方沙弥の妻と同様に年若い乙女である。もう一つ『常陸国風土記』香島郡童子女松原はさらに説話的完成度が高い。遠く異郷の地にあつて、噂を頼りに思いを寄せ合っていた海上の安是の嬢子と那賀の寒田郎子は、嬢歌（歌垣）の会で出逢う。二人は「茲宵茲に、楽しみこれより楽しきはなし。偏へに語らひの甘き味に沈れ、頓に夜の開けむことを忘る。」状態で夜を語り明かし、夜明けと共に姿が露われることを恥じて松の木に化したという。高橋虫麿の記述という説もある、四六駢儷体の美しい文章で語られるこの悲恋の主人公達は、「神のをとこ神のをとめ」と呼ばれる「年少き儺子」であったと記されている。この伝承は、大人に成熟する前すなわち結婚前にある神秘的な期間を経ること（特に女の方に）、それはまた神秘故に壊れ易い危険を孕んだ時間であること、さらにその間の乙女は、神の女としての戒律に従って忌み籠りをする事、それを破るこの結果を、嬢歌を舞台として設定し語ったものだった。

③の「花つ妻」を折口信夫は「はな妻」と訓んで、「手のさはられない、即ち物忌みの時期にある女で、語を換へて言へば、結婚の前提の時期にある女の事である。」と説いている（『古風の婚礼 はなかつら』『折口信夫全集 第十五巻』）。この根拠として、「はなかつら」と「はなかつら」とを挙げて、「はな」と「はね」とは転の関係で同じであり、両方共成女のかづらであると言う。そ

の上で、『万葉集』巻七、「葉根蘊今為る妹をうら若みいざ率川の音の清けさ」(巻七―一二二)の「今為る妹」を、「新しく成女とならうとしてゐる娘」すなわち成女戒にある妹であると説いている。忌み籠りをする「うら若」い女故に、「いさ」という、相手を誘発する力がより生き生きとして来、「音の清けさ」に若者の純正な心臓の鼓動を聞く思いがする。『万葉集』にはこれ以外にも、「葉根蘊今する妹を夢に見て情のうちに恋ひ渡るかも」(巻四―七〇五)、「葉根蘊今する妹は無かりしをいづれの妹ぞ幾許恋ひたる」(同 七〇六)が加えられる。右の二首は、それぞれ「大伴宿禰家持の童女に贈れる歌一首」と「童女の来り報へたる歌一首」の題詞を持つ贈答歌で、家持の相手が年若い童女であったことが知られる。軽妙洒脱な二人の応酬の中に、折口信夫の挙げた巻七の歌と同形の「葉根蘊今する妹」という歌い出しが、瑞々しく力強く響く。③の「花つ妻」、②の「身の若かへ」、①の「にこやかにわれと笑まし」た乙女達は、それぞれ③「紐解かず寝む」、②「さ寝し児らはも」、①「人に知らゆな」と対応しながら、同列に立つ。結婚前の準備段階という特別な時空には、まだ若く幼いとも見える乙女達が、にこやかに笑みを湛えて恋人に合図を送っている。それは、「和草」の総体としてのありようであり、「柔らかな草」からは引き出せない呪の世界に根生う「草」でもある。

④の家持の七夕歌の序「秋風になびく川辺の和草の」は、前後の歌の関係から天の川であることが分るが、それ自体、すでに神秘的な領域である。型は②の「射ゆ鹿をつなぐ川辺の和草の」と同じであり、②は先に触れたように、『日本書紀』歌謡「射ゆ鹿を認ぐ川辺の 若草の」と類歌関係にあった。この表現の型は、『古事記』歌謡、仁徳天皇の皇后磐之姫の「つぎねふや 山城川を川浜り 我が浜れば 川の辺に 生ひ立てる 鳥草樹を 鳥草樹の木 其が下に 生ひ立てる 葉広 斎つ真椿」と類想し、古様式の伝統を持つ。これはまた、「和草」の歌い込まれた意味が、古い語りに根差すものであることをかすかに伝えているように思える。「和草」が古い時代の思想的生命観に根差す語であるとするならば、この「和草」の原点とも考えられる非常に特異な「草」を、『古事記』歌謡の中に見出すことができる。それは、八千矛神の妻寛ぎ伝承の中で、沼河比売が八千矛神に贈った歌謡の中の「萎草」である。

八千矛神は、妻に相応しい「賢し女」「麗し女」が居ると聞いて、はるばると出雲から越の国に巡行して来る。旅装も未だ解かないまま、夜毎通い続けて沼河比売の家の戸を押したり引いたりして求婚するけれども、一向にその徴がない。その時歌った八千矛神の歌謡に答えて、沼河比売は次のように歌った。

八千矛の 神の命

萎え草の 女にしあれば

我が心 浦渚の鳥ぞ

今こそは 我鳥にあらめ

後は 汝鳥にあらむを

命は な死せたまひそ

以上は歌謡の前半の部分であるが、大意は、「私は今萎え草の女であるのでまだ妻となることは出来ませんが、後にはあなたの妻となりますから、死なないでいて下さい。」というものである。未だ八千矛神の求婚を受け入れる段階に至っていないことを「我鳥」と標榜し、耐えて待ってほしいと切望する沼河比売の歌謡の前半は、「萎え草の女」であることを絶対条件と成して展開する、筋立のある語り事である。したがって「萎草」は、沼河比売の婚前のあり方に係わる重要な証徴として、修辞という概念を越えねばならない。

「萎草」は、『万葉集』にも用例がなくこれも難解語の一つである。右を枕詞と決めかねるとする高木市之助の解釈（朝日古典全書本『古事記』もあるが、大方は、「芽」から「女」あるいは「売」にかかる枕詞と見る。そして「ぬえ」は「萎ユ」の音韻変化で、『万葉集』の「なよ竹の」とをよる子ら」（巻二二七）に同じとし（西郷信綱『古事記註釈』、土橋寛『古代歌謡全註釈 古事記編』、武田祐吉『記紀歌謡集全講』、倉野憲司『古事記全註釈』など）、「萎草」の意味は、「なよなよした草、なえしなう草、なよやかな草」となる。『時代別国語大辞典 上代編』にも同様の説明をし、「なよたけ」の項でも「ナユ・ナヨは、萎ユと語源を同じくするかと思われる。」と説明している。しかし、「萎え草の女」を「なよなよした草」と解した場合、「なよなよした草のような女であるから」という、いともか弱くしかも健気に振る舞う女として造形されてくるものの、それが何故、今妻となることができないという意に回帰して行くのか、説明できる明確な言葉が見出せない。このことは、先の「和草」についても抱いた疑念であった。

「なよ竹（なよ竹）」の用例は、『万葉集』に二首、右（二七）の柿本人麿作「吉備津采女死時」の挽歌と、もう一首は「石田王卒之時、丹生王作詞」の冒頭「なゆ竹の」とをよる皇子」（巻三二四二〇）で、ここにも人麿の影が背後に見え隠れしている挽歌である。両首の「なよ竹の」とをよる子ら」「なゆ竹の」とをよる皇子」は、生前の、生命力あふれた竹のようにしなやかで美しい姿を言っている。さらに、「なよ竹・なゆ竹」の懸かる「とをよる（とをむ、とをを）」にまで意味を広げると、この語は右の二首以外、全て、波・海の怒濤（二例）、植物の花や実の豊かな様子（六例）の意であって、ものの熟成した、生命の躍動感に溢れた「動」の印象である。したがって、まだ求婚を受け入れられず、八千矛神の歌謡を聞きながら気持が切迫しているであろう沼河比

売の「静」の「萎草」とでは、全くニュアンスが異なるのである。沼河比売が八千矛神を拒絶するのが聖婚儀礼の通過点であることが、後には「汝鳥」になると明言していることによっても分る。それは、折口信夫の言う「手のさはられない」、成女になるための「結婚の前提の時期」にあるというのが沼河比売の「今」であろう。とすると、その意味から「萎草」と「和草」とを同一線上に立つ観想によって括ることが出来る。結婚するにまだ達しない年若く幼い乙女は、成女との間の境界領域で忌み籠ったままその時の到来を待つ。そして沼河比売の歌謡の後段は、次のように歌われて行く。

青山に 日が隠らば

ぬばたまの 夜は出でなむ

朝日の 笑み栄え来て

栲綱の 白き腕

沫雪の 若やる胸を

素手抱き 手抱き拔がり

真玉手 玉手さし枕き

股長に 寝は寝さむを

あやに な恋ひ聞こし

八千矛の 神の命

右は、沼河比売の忌み籠りが解け八千矛神との成婚が遂げられる、神婚叙事である。特に「栲綱の」以降は、聖なる神々の結婚が行なわれていることを幻視する重要な詞章として、宮廷歌謡の中に継承されている（八千矛神の嫡后須勢理毘売の歌謡。継体天皇紀七年九月、勾大兄皇子の歌謡。「朝日の 笑み栄え来て」は、祝詞の「朝日の豊栄（逆）登り」（祈年祭、広瀬大忌祭、竜田風神祭、六月月次、大嘗祭、出雲国造神賀詞）が称詞であるのと等しく、成女戒を了えた女の称詞、境界領域からの解放の祝詞として、太陽の生命力を宿した笑み栄える女の誕生が鮮烈に印象づけられる。「笑み」が、結婚前の乙女から女への境界で重要な意味を持つ呪的行為であることは、先に見た『万葉集』の乙女達の眩惑的な笑みが神話の世界に帰属した遙然たる「笑み」であったことを物語る。

沼河比売の歌謡は、八千矛神の歌謡と共に、往古の結婚観とその様態とを裏付けとして語られる神婚の、時間軸を持つ最も叙事性の高い歌謡である。したがって、歌中の「萎え草の 女にしあれば」が語りの時空の中で果たす意味は、沼河比売の内質を様態

から画然として表徴する、呪を孕んだ語であったと考えるのである。「萎草」は、古代の人々が神婚を幻視するまさにその時に、朝日のような笑みによって草叢の中へ霧消して行く、若く幼い乙女の生命の「草」であった。

「和草」は、「萎草」の万葉調の言い換えではなかったかと考えている。記紀や万葉には、「にき・にこ」の語彙が「にきたへ、にきはだ、にきめ、にきぶ、にこで、にこし、にこやかに」等豊かに派生し、親しく人々の口に膾炙された陽性の語であった。これに対して「ぬえ」は、「ぬえくさ、ぬえどり、ぬえこどり、ぬえ（鶴。仮名遣は萎草と同じ）」と、限られた特殊な用法に偏向している。八千矛神の歌謡に登場する三種の鳥「鶴、雉、鶏」の内、類歌関係にある『万葉集』卷十三—三三一〇には、鶴のみが消えている。その上、「ぬえこどり、ぬえどり」は、「ウラナキ、ノドヨフ、カタコヒ」にかかる陰性の枕詞となる。これは、「ぬえ」という音がおそらく古代語の音韻論外的な性質で、非常に強い呪性を持つ故に遠ざけられていったのではないかと推測する。万葉の「和草」は、古事記歌謡の神謡の稀少の例として残る「萎草」の線上にあって、まさに「笑み」の中から新生した語ではなかったか。しかし、その芳潤で幻想的な「和草」の発想は、「草」であるかぎり茫漠さから抜け出ることではないであろう。次第に「草」は精選され、「草」から「花」へと、文芸的転換をはかって行く時がやがて訪れる。その時「草」は、清新な呪性を失って行く。たとえば、『万葉集』の「をみなへし」が、はるばると訪い来た客人を饗応する宴席で、主人を讃め客人を慰める花であったのに対して、中古以降、雑草として男に媚びる遊女の扱いに転じて行く。まして万葉には「をとこへし」と並べられる発想もなく、無論「をとこへし」もない。この変化が、「萎草」も「和草」も成女戒ごと飲み込んで、艶美な「花」にかわるのである。それは、「萎草」「和草」が神話的時空を失って行くのと関係があるう。

「萎草・和草・若草」は、全て「妻」に関する「草」であった。共に難解であるが、「ぬえ・にこ・わか」と並べると、ここにさえ時系列が見えて、固有の草の名を指すと考えることの狭小なるに思いが至る。『万葉集』は「つぼみ」という語を持たない。「ふふむ」と言った。木にも花にも言い、そこに新生の時を待ち続ける。皆、古代の人々の、神話的時空領域との諧和であった。

(ますだ よしこ 日本語日本文学科)